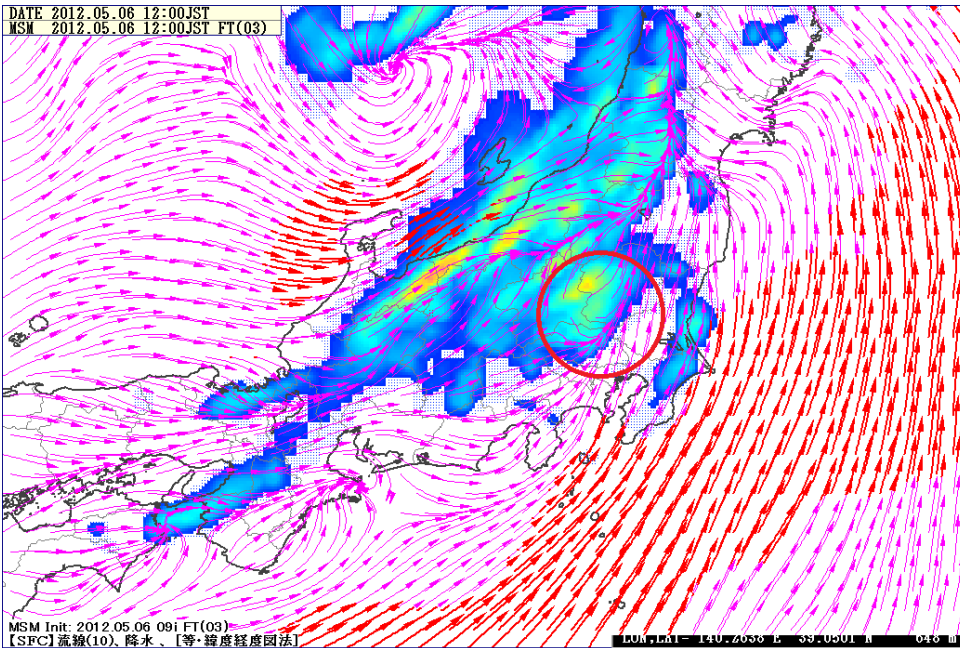


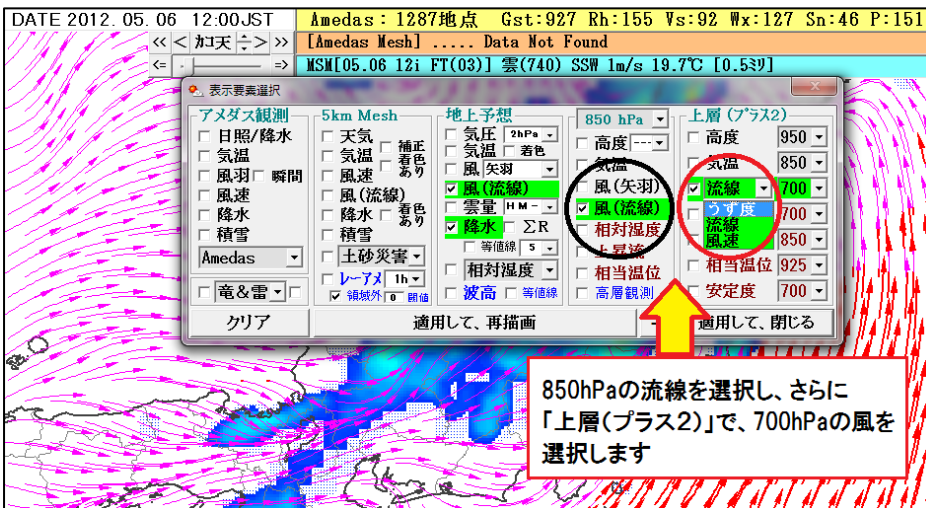
<風の鉛直シア>

下層から上層にかけて、風がどんなふうになっているのか？雲の発達や進行方向などの動向にとっても重要です。例えば、2012年5月6日につくばで国内最大の竜巻が発生した時の予想図を見てみます。

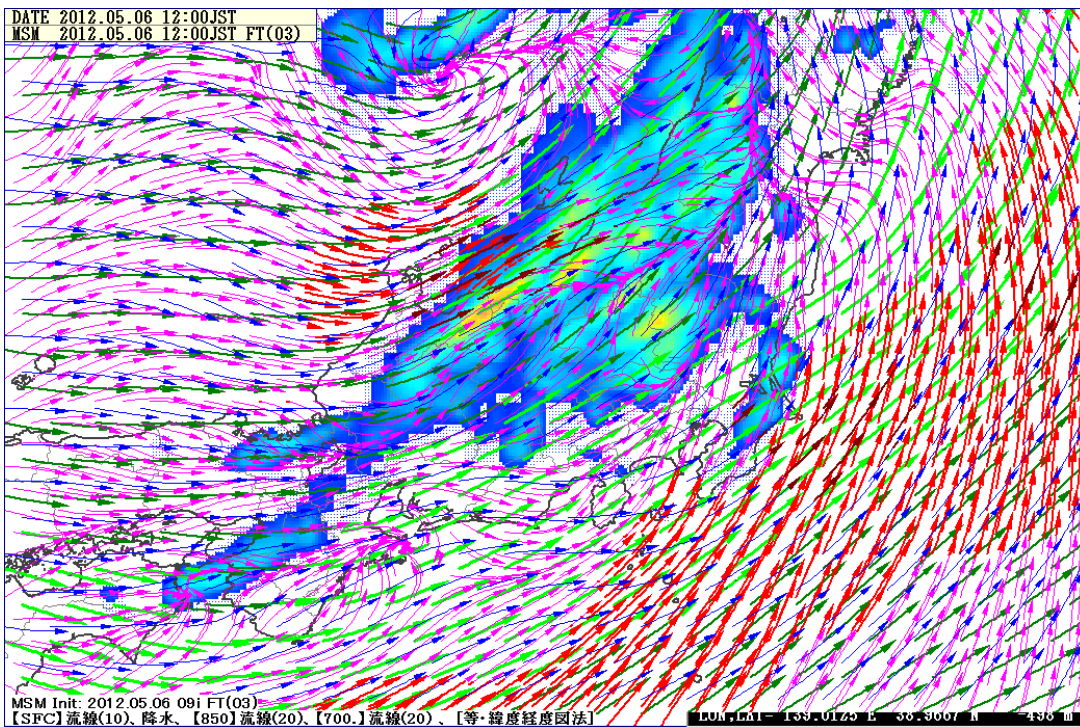
①地上の流線と降水の予想図（MSM）です。赤丸で囲った所に現れているように、強い南寄りの風と風の弱い所で収束線が現れ、その北側に沿って大きな降水量が計算されています。これは、地上の風だけの予想ですが。



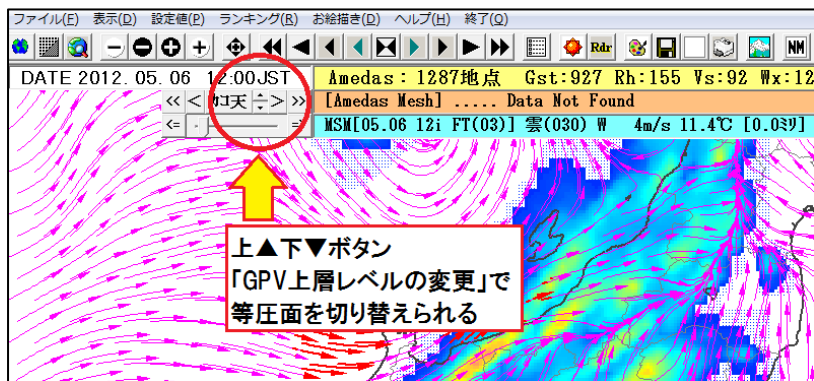
②地上の他に、850hPa、700hPa の流線を重ねてみます。



③地上、850hPa、700hPaの流線の重ね。地上がマゼンタと赤、850hPaが青、700hPaが明緑。



関東平野は、下層から上層にかけて風向が時計回りに変化する明瞭な鉛直シアがあり、暖気移流場の中で、できた雲の発達に好都合な風の間になっています…が、この広さで見ると、重なりが多くて分かりにくい。そんな時は、悪いことが起こりそうな怪しい時間帯に、ボタン一つで、下層の風から上層の風まで切り替えて、見ることができます。



一層ずつですが、要素選択でわざわざ変更しなくても、下から上、上から下へと、風の変化を見ることができます。つくばの竜巻が発生した時は、地上風の風向が予想よりも南成分が大きく、収束が強かったので、局地的に強い上昇気流で積乱雲が発達したのかも知れません。

